

熊本地震発災後の取り組み



熊本市男女共同参画センター
はあもにい

藤井 宥貴子



まさかの熊本地震。 尊い命も豊かな自然も、お城も、一瞬のうちに...

熊本市男女共同参画センターはあもにい

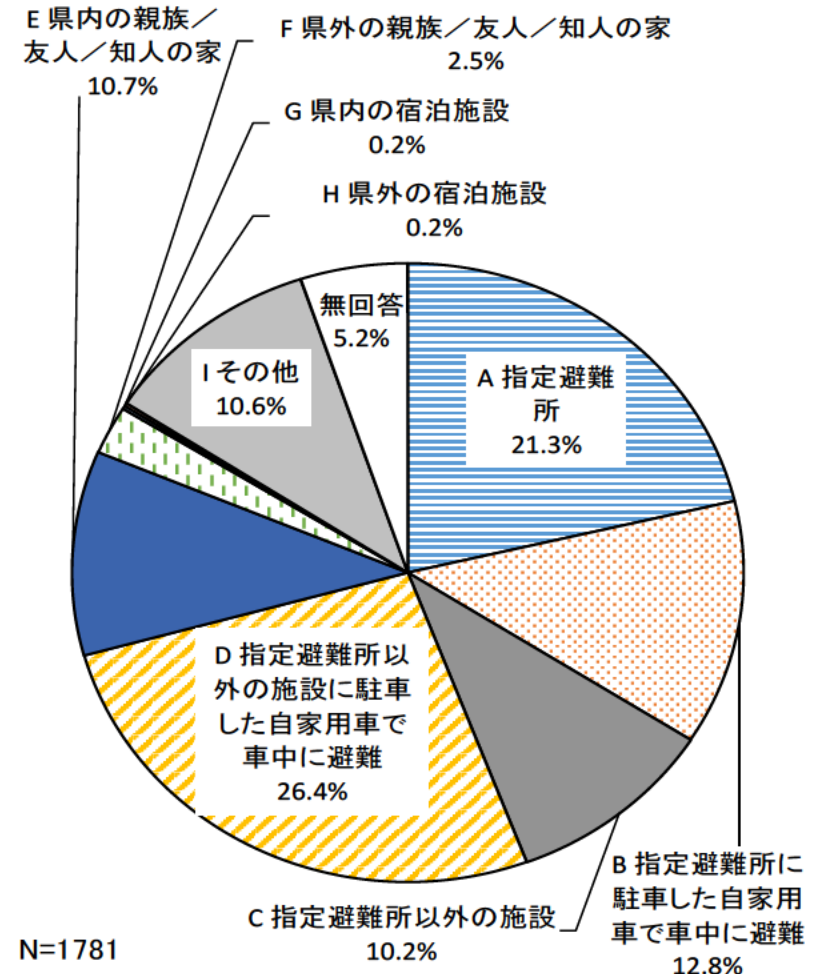
熊本地震の特徴

●震度7の地震が立て続けに2回発生
(観測史上初)

●一連の地震で震度6弱以上の地震が7回発生(観測史上初)

●余震の発生回数(累計)は、10月17日に**4,100回**を超えた

●車中泊が多かった
避難所が一杯だったことや地震が連続したことにより建物内を避けたと考えられる



はあもにいの発災直後の動き

4月14日 前震

①夜間 避難者受け入れ＊課長へSNSで連絡

15日 平常業務

②性被害・DV チラシ作成
～22日より配布

16日 本震 スタッフの安否確認

17日 休館(一部スタッフのみ出勤)

③支援物資配送

28日 ④避難所キャラバンスタート

⑤幼児室開放・サテライトオフィス

5月8日 ⑥会館内に集約避難所 開設

8月13日 避難所閉鎖



避難所の様子

一時避難所



集約避難所

休める場所を探し回る避難家族の様子。
避難所に入りきれない市民も多く、やむをえず
車中泊を選ぶというケースも。

避難所の環境改善



『こんな非常時に、性被害など
起こるはずがない！』

『不安ばかりをあおっている！』

『つらいのは女性ばかりではない。

男もつらいんだ...』

『嫌なことを思い出して、つらい...』

＊二次被害は一件も出したくない
出さない！という思い

見えてきた課題

- ①女性や子ども、弱者支援の視点は避難所運営に生かされていたか？
- ②避難所運営などに固定的性役割分担の状況が多く見られることはなかったか？
- ③支援者も被災者であるという認識が欠けていなかったか？
- ④自立につながる支援となっていたか？
- ⑤関係各所の連携はスムーズだったのか？

今後の取り組みについて

『日常的にできていないことは

非常時にはできない』が大前提！



- ①災害時の会館の位置づけ・役割の明確化
- ②ジェンダー視点を取り入れた防災講座などの実施
- ③防災リーダーの育成
- ④会館スタッフの専門性の強化
- ⑤地域の社会資源との連携強化
- ⑥地域のコミュニティづくりにつながる事業の提案・実施
- ⑦支援団体のネットワーク化
- ⑧備えを日常化するためのキャンペーン・イベントなど

子どもの笑顔があふれる避難所...



**熊本の真の復興に、
男女共同参画の視点は不可欠！**

熊本市男女共同参画センターはあもにい



熊本地震からの復興
これからのコミュニティ再生について

熊本市男女共同参画センター はあもにい
館長 藤井 宥貴子

1: 避難所キャラバンを行いながら 必要だったと思うこと



- ①自分の身は自分で守るという自覚と備え
- ②“おたがいさま”の心
- ③自分以外の人を思いやるイメージ力
- ④非常時に発揮されるリーダーシップ・判断力
- ⑤つながるチカラ



*** 日常的にできるようにしておくこと**

熊本地震からの復興 これからのコミュニティ再生について

西原村 大切畑の奇跡

全26戸 100人

激震後 消防団員4人が二手に分かれ安否確認。ひしゃげた家屋の下から3時間で9人を次々、救出。ほとんどの家屋が損壊するという中で、**一人の犠牲者も出なかった。**

断層の上にある地区であるがゆえの、**日常の備え。**
消防団では**家族構成や家の間取りなども把握されており、避難生活も、住民の役割分担がスムーズに行われていた。**



益城町の自主避難所

女性リーダーを中心に、自主運営が行われていた避難所。昼間は間仕切り用のカーテンはすべて開かれており、風通しがよく明るい雰囲気だった。避難所の中心に、**カフェスペース**や**子どもスペース**が確保されていた。

同じ仮設団地に入居する人たちは「近所にして欲しい」と、要望を出されたとのこと。



コミュニティ再生に必要な視点とは

- ①人が基本という考え方
- ②ハード面とソフト面を一体として考える
- ③住民が自ら参加する仕組みづくり
- ④一人ひとりが自分事としてとらえ、楽しく取り組める環境の構築
- ⑤声なき声を置き去りにしない

災害に負けない



日本でいちばん幸福度の高いコミュニティを創る！

